

第18回 トラウマティックストレス学会を主催して

大阪医科大学 看護学部 教授

元村 直靖

2019年6月15日から16日に第18回日本トラウマティックストレス学会を、京都テルサにおいて開催いたしました。学会では、プレコンも企画されており、PTSD(Posttraumatic stress disorder)の認知療法についての講習会やPTSDに関するアセスメントであるCAPS(Clinical administered PTSD)講習会も行われました。また、近年、安全な日常生活を揺るがす事件が国の内外で多発しており、トラウマが身近な事象になりつつあります。本学会では、18年間蓄積されたトラウマの知識や課題について真剣な討議がなされました。友田先生に基調講演をいただきました。さらに、海外から招聘されたオーストラリアのブライアン先生が基調講演をされました。まず、日本の基調講演は、福井大学の友田先生は、基調講演として虐待と脳について発表されました。子どもの虐待との脳との関係について述べられました。、暴言虐

待による聴覚野の肥大、性的や親のDV目撃による視覚野の萎縮、厳格な体罰による前頭葉の萎縮があきらかになりました。虐待を受けて育ち、養育者から虐待を受けて育ち、養育者としての愛着反形成応をうまく形成できなかった愛着障害児は報脳の感受性はよわく、その感受性も生後1-2歳にピークになることを発見されました。

一方、ブライアン先生は、ニューサウスウェールズ大学の教授であり、トラウマストレスクリニックのディレクターをされています。まず、ブライアン先生は、急性ストレス障害(Acute stress disorder; ASD)患者さんの初期症状に着目し、トラウマ発症後の早期介入を行なっています。また、PTSDの診断基準であるDSM-5とICD-11の委員を勤められています。さらに、PTSDを発症する鍵となる遺伝子・神経・心理的要因の研究を行なっておられます。特に、ブライアン先生は社会因子がトラウマとコーピング形成に重要であることを述べられました。

トラウマからの回復が学会のテーマであり、全体でシンポジウムは16にわたり、特にポスターセッションは38の発表がなされました。ところで、この学会では、自然災害や、人為的災害、児童虐待、性暴力被害などの報告が見られ、様々なトラウマとそのケアがテーマとなり、活発な議論がなされた。

学会の参加人数は、大会で参加数は約600名であり、学会員が約1000名ほどであることから、この領域の関心の高さがかがえれます。

